

令和3年度

日野市立教育センター紀要

第18集



日野市立教育センター

目 次

あいさつ

「教育センター紀要第 18 集の発刊にあたって」 日野市立教育センター所長 正留 久巳 …… 1

令和 3 年度 教育センターの部・係〈担当〉 …………… 2

A 調査研究部の事業

1 教科等教育係 「理科教育推進研究」 …………… 3

2 ふるさと教育係 「郷土教育推進研究」 …………… 9

3 教育資料・広報係 …………… 17

B 研修部の事業

教職員研修係 …………… 18

C 相談部の事業

学校生活相談係 …………… 22

編集後記 …………… 32

教育センター紀要 第18集の発刊にあたって

日野市立教育センター所長 正 留 久 巳

令和3年度も、コロナ禍で世界も日本も影響を受け社会も様々な変化を余儀なくされました。東京オリンピックは無観客での実施となりました。パラリンピックも多くの制限の中での実施となりました。本来であれば、子供たちは、実際の観戦を通し多くの感動をすることができたはずでした。しかし、映像から、全力を尽くすアスリートの姿に感じるものが多くあったと思います。日野市立全小学校の子供たちが製作したオリンピック・パラリンピックの応援ポスターは心のこもった素晴らしいものでした。いい思い出となったと思います。

また、本年度は第3次日野市学校教育基本構想（2019～2023年度）の3年目でした。しかし、今年も学校現場では、スタートからコロナ禍により教育計画の変更をせざるを得ない状況が続きました。教育基本構想では、子供たちが自分に合った多様な学びと学び方を身につけることを目標にしています。その実践的な研究をより深める3年目でもありました。

教育センターは、各事業を進めるにあたって、「子供たちが主体性をもち学びを進める力を育むため、現場とつながり、授業力の向上を支える」ことを念頭にそれぞれの事業に臨みました。

郷土教育では、研究主題を「郷土への愛着を深め、地域と共に生きようとする児童の育成」とし、授業を通して実証的に研究を進めました。昨年度に引き続き、1課2館（ふるさと文化財課、図書館、中央公民館）との連携を進め、一層新しい指導につながりました。2学期は研究授業が実施でき、主題にせまる多くの成果を得ることができました。

理科教育では、「ひのっ子が主体となる理科教育」をテーマに研究してまいりました。自然や事物とのかかわりの中で自ら考えようとする子供を育てるため、教員の指導力向上と魅力ある理科授業を目指し、「理科支援センター」として学校・教員をサポートするあり方について実践研究を進めました。関係機関との連携を大切に、課題別研修、出前授業などを進め、授業で活用できる教材の提供などを実施しました。本年度は、日野市内を流れる浅川を題材に教材化に取り組みしました。

若手研修は、子供たちの未来に向けて身につけるべき資質の涵養にむけ、授業力の向上や子供たちの主体的な学びの育成に向け、その教員の良さを大切に、指導助言にあたりました。

わかば教室では、主体的な学びの活動を重視し、わかばタイム、わか데미ー、eラーニングを進め、ソーシャルスキルトレーニングでは個に応じた方法にも取り組みました。特に表現活動では主題をとらえることを大切にしました。GIGAスクールでは端末を調べ学習はもちろんコミュニケーションのツールとしてなど様々な活用ができました。

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策のため教育センターの発表会も、中止となりましたので、C4thでの報告とさせていただきます。紀要と併せてご覧頂けると幸いです。

日野市の教育は「未来に向けた学びと育ちの基本構想」をもとに、新たな学びの創造に向かっています。コロナ禍で、なかなか進まない面もあり、もどかしさもありますが、教育に関わる我々大人が踏ん張り頑張る時でもあります。これまでの経験をいかし、常に先駆的に、所員一同努力してまいります。今後とも、教育センターに対するご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

令和3年度 教育センターの部・係〈担当〉

所 長	正 留 久 巳
主任研究員 教育部参事	谷 川 拓 也
教育センター担当 統括指導主事	馬 場 章 夫
教育センター担当 指導主事	赤 羽 利 章
事 務 長	田 中 勉

調査研究部	◆印（主任）	○印（係主担当）
●教科等教育係	理科教育推進研究	◆岩 井 徳 二
〃		千 葉 正
●ふるさと教育係	郷土教育推進研究	◆中 村 康 成
〃		尾 形 斉
●教育資料・広報係		正 留 久 巳
〃		千 葉 正
〃		岡 部 秀 敏
〃		田 中 勉

研 修 部		
●教職員研修係		◆千 葉 正
〃		○岡 部 秀 敏
〃		○尾 形 斉

相 談 部		
●学校生活相談係	わかば教室（教室運営）	◆須 藤 昭 人
〃	〃 〃	森 本 友 明
〃	〃 〃	池 本 ユウ子
〃	〃 （指導員）	藤 原 千 恵
〃	〃 〃	橋 本 友 美
〃	〃 〃	塚 崎 昌 代
〃	〃 〃	星 野 ひとみ
〃	わかば教室カウンセラー	加 藤 枝利子
〃	〃	清 水 一 広
〃	登校支援	酒 田 百合枝

事 務 部		
●事務職員		宮 澤 功 一
〃		大 谷 二 郎
用務員		守 屋 敦

A 調査研究部の事業

1 教科等教育係

—理科教育推進研究—

理科教育推進研究委員会

I 研究テーマ

「ひのっ子が主体となる理科教育」

II 研究テーマ設定の理由

昨年度の研究成果を基に更なる深化を目指し、これまでの研究テーマを引き継いで、今年も実践研究を進めることとした。

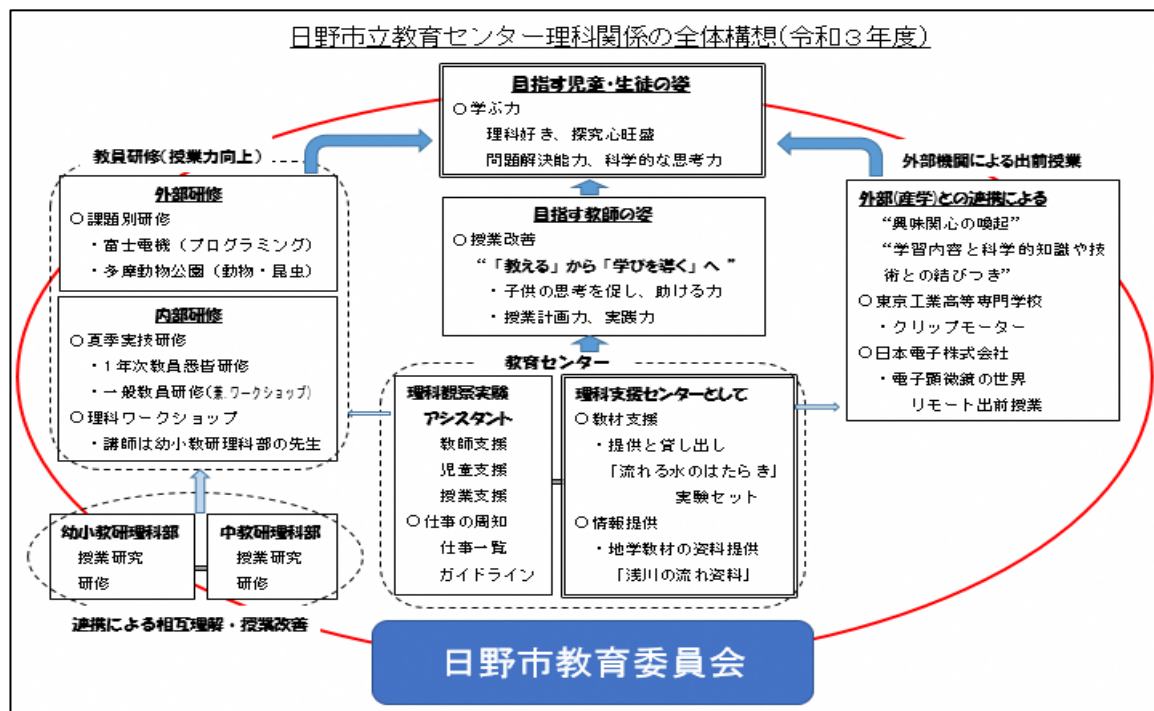
学習者であるひのっ子が主体となるためには、魅力ある理科授業を展開することが第一と考える。授業を支える要素である「教員の授業力向上」と「日野の自然を題材とする教材環境の整備」を中心に、本年度も研究テーマの実現に向けて取り組んできた。

研究の趣旨

自然や事物とのかかわりの中で自ら考えようとする子供を育てるため、教員の指導力向上と魅力ある理科授業を目指し、「理科支援センター」として学校・教員をサポートするあり方について実践研究する。

また授業への支援を通し、日野の自然についての教材化を推進する。

III 研究の構想



理科教育推進に関する取組みをまとめ、図に表したのが、この「研究構想図」である。理科支援センターとしての取組みを中心に、教員研修や外部機関による出前授業を、日野市教育委員会

や幼小教研理科部・中教研理科部との連携の中で取り組んだ。学校、教員を支援することによって、研究テーマである「ひのっ子が主体となる理科教育」が推進できるものと考えた。

今年度は、COVID-19 流行の下火になった時期があり、対外的なかかわりのある活動もある程度実施できた。一定の成果は上がったが、状況に応じた柔軟な対応の必要性を痛感した年でもあった。今年度実施できた活動について以下に報告する。

IV 実践

1 研修を通して教員をサポートする取り組み

(1) 課題別研修

- ・安全で楽しい理科授業実施能力の育成
- ・幼小教研理科部との連携
- ・COVID-19 に対応した研修の実施

① 理科実技研修

日野第四小学校にて

・基礎編

～小学校教員採用1年目対象～

理科実験の基礎技能と安全

楽しい理科実験

・実践編

～小学校一般教員対象～

簡単で効果的な実験の体験

※講師は幼小教研理科部の先生方



ミジンコの顕微鏡画像をテレビに投影して



食塩のとける様子を1mのアクリルパイプで

② 富士電機研修

富士電機東京工場にて

・クロムブックを使ってプログラミング

日野市立小中学校で一人一台配布されているクロム

ブックをマイクロコンピュータ（Arduino）につなぎ、

ビジュアル言語（スクラッチ）でプログラムを作成

※講師は富士電機社員の皆様



テキストを見ながらプログラムを作成

③ 多摩動物公園研修

・動物の体のつくり～「頭」編～（11月）

動物公園で亡くなった動物の頭骨を使って

肉食・草食・雑食によるあごや歯の違いなど



骨格標本の観察

・昆虫スキルアップ実習（12月）

虫嫌い（苦手）克服を

仲良くなれるさわり方



(2) 理科ワークショップ

実施できなかった昨年度を振り返り、今年度は幼小教研の理科部の活動として1回実施することができた。内容は昨年度に準備したことを基に次のとおり実施した。

- ① 4年「もののあたたまり方」：空気の温度変化を可視化しよう
～サーモインクをしみこませた紙のリボンを使って～
 - ② 5年「もののとけ方」：食塩の粒がとける様子を見よう
～1mの透明アクリルパイプに入れた水に食塩を落として～
 - ③ 6年「植物の成長と水の関わり」：葉の気孔のレプリカを作って観察しよう
～葉の表面にマニキュアを塗って気孔の形を写し取ろう～
 - ④ 5年「メダカのたんじょう」：メダカの成長を観察しよう
～児童が卵から飼育することを通して～
- その他

なお、この取り組みについては、課題別研修理科実技研修(実践編)においても紹介した。

2 外部団体による出前授業の取り組み

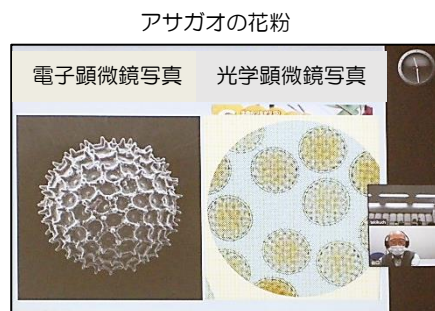
(1) 「電子顕微鏡のミクロの世界」

～日本電子株式会社～

COVID-19の流行に対応するため、日本電子社内にある電子顕微鏡をリモートで操作する体験授業を、日本電子、ICT活用教育推進室、教育センターの3者協力のもと作成した。

授業は教育センター内わかば教室の児童生徒を対象に実施し、リモート授業実施の際の成果と課題を抽出した。

授業前半は日本電子社内からリモートでの電子顕微鏡の仕組み等の講義を全員で受け、後半はパソコンで電子顕微鏡をリモートで操作する体験をした。会場は、教育センター内の講堂を使い、互いに距離を取って行った。



(2) 「クリップモーターを作ろう」

～東京工業高等専門学校～

エナメル線を巻いて作ったコイルに電気を通し、発生した磁力と永久磁石とのはたらきで回転させる「クリップモーター」を、身近な素材(ゼムクリップ、紙コップなど)を使って作成した。

12月・2月に、小学校2校で実施した。

※ 東京都立大学による出前授業は、今年度は実施できなかった。



3 理科支援センターとして学校・教員をサポートする取り組み

(1) 教材教具の提供と授業を支援する資料の配布

① 教材の提供

- 各校からの希望に応じて、キャベツ苗・メダカの卵、関東ローム層の土、有孔虫を含む砂(上総層群)を提供
「流れる水のはたらきと土地の変化」浅川の流れの映像資料、「日野の大地の話」プレゼン資料を C4th にて提供
- その他の教材教具の貸し出し
貸出可能教材教具一覧表の公開

<貸し出しの実績>

気体採取器、大型てこ、手回し発電機、
流れる水のはたらき実験セット、
双眼実体顕微鏡(ファールミニ)
長さ1mの亚克力パイプ(「物の溶け方」用)、電子天秤 他

キャベツの苗



メダカの卵



有孔虫の化石

流水実験セット



浅川の流れ

② 情報の提供

- 年間単元配列・準備一覧
- 教育センター植物図鑑
- 昼間見える月カレンダー
- 小学校理科飼育・栽培の準備
- 水溶液のつくり方
- 種まきの豆知識
- カセットコンロやカセットボンベの経年劣化
- 身近な可燃性物質に注意(特にアルコール消毒液等)

(2) 「日野の自然」の教材化

5年「流れる水のはたらきと土地の変化」

「浅川の流れ映像資料」(山の中の浅川・平地に出た浅川・平地を流れる浅川)

「流水のはたらき実験セット」の作成、貸し出し

① 浅川上流～中流の流れの様子の教材化

大日本図書の理科教科書では、流れる川の水のはたらきを「山の中を流れる川」「平地に流れ出た川」「平地を流れる川」とポイントを定めて次のように示している(次ページ図参照)。どの川も日本の代表的な河川だが、日野の子供たちにとってはあまりなじみのない川である。そこで、日野市内を流れる浅川を取り上げることにした。

浅川は、関東山地の和田峠付近を源に陣馬街道に沿って八王子市内を流れたのち、日野市内を東西に横断して多摩川にそそぐ一級河川で、日野市民にとっては市の北を流れる多摩川と共になじみの深い川である。身近な浅川を教材として取り上げることで、学習をより身近なものにできると考えた。



まず、浅川の上流から多摩川に合流するところまでを実際に調査し、大日本図書の教科書と比較できる3か所の流れ(「山の中…」「平地に…」「平地を…」)を選定した。

次に、それぞれの地点の流れの映像と動画を浅川の地図に入れ込み、プレゼンテーションの画像として視聴できるようにした。次の図に示す。

山の中から平地にかけて川や川原の様子を調べる(八王子市～日野市を流れる浅川)

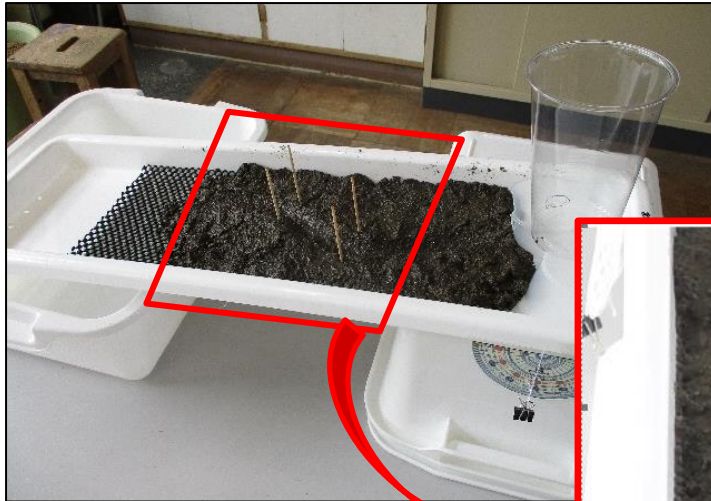
—大日本図書小学校5年理科教科書P.92～93に対応—



※ PC上でクリックすると、それぞれの地点の流れを視聴することができる

② 「流水のはたらき実験セット」の作成(次ページ写真参照)

大日本図書の理科教科書では、流れる水が土地を削る働きを確かめる実験が紹介されている。室内でできて学習効果の期待できる実験なので、教育センターで作成して貸し出すことにした。C4thで紹介し、今年度は小学校2校に貸し出し、授業で活用された。



流水の「浸食」「運搬」の作用を動画で視聴できる



4 理科観察実験アシスタント配置事業

理科授業の充実を目的に日野市立の全小学校で実施されている「理科観察実験アシスタント配置事業」。教材教具の準備や片付け、理科室・理科準備室の環境整備など、理科においては授業時間以外の仕事は多い。それをサポートするのが本事業である。授業者への支援、児童への支援を通して、教員の指導技術の向上と主体的に学ぶ児童の育成を目指してきた。

V 今後の課題

理科をはじめとして指導に専門的な知識や技能の必要な教科では、専科教員の配置が方向づけられてきている。それらを考慮して、以下に課題として引き継ぐ。

- ・ 理科支援センターとして発信した情報・資料が、先生方にどれくらい、どのように使われているのか、また使ってみてどうだったのかの反応をどのように把握し、活用していけるか。
- ・ 現況に合った理科ワークショップをどのように形作っていくか。
- ・ 理科専科教員連絡会のようなものを開催すれば、本市理科教育の活性化を図っていけるか。
- ・ 理科教育推進研究委員会委員として、理科専科教員の参加が有効ではないか。

VI 研究委員会委員

- | | | | |
|----------------|----------|-------|------------------------|
| ・ 委員長 | 平山中学校長 | 和田 栄治 | |
| ・ 副委員長 | 仲田小学校長 | 沼田 忠晶 | |
| ・ 委員 | 学識経験者 | 馬場 武 | 元日野市教育委員会委員長職務代理者 |
| | 専属理科支援員 | 大澤 真人 | 教育センターOB・理科ワークショップ指導講師 |
| | 幼小教研理科部長 | 中村 優太 | 日野第七小学校教諭 |
| | 中教研理科部長 | 平賀 紘子 | 三沢中学校教諭 |
| ・ 担当指導主事 | | 宮崎 友和 | 日野市教育委員会 |
| ・ 理科教育コーディネーター | | 岩井 徳二 | 日野市立教育センター所員 |
| | | 千葉 正 | 日野市立教育センター所員 |

2 ふるさと教育係

—郷土教育推進研究—

I 研究の構想

1 研究主題

第3次日野市学校教育基本構想を受け、令和3年度の研究主題を「郷土への愛着を高め、地域と共に生きようとする児童の育成」とした。副主題は「グループの研究テーマ」として研究グループごとに設定した。

2 研究の手立て

(1) 研究主題に迫るため、目標とする授業像を明らかにし、全員で共有した。(下表)

	郷土への愛着を高める児童	地域と共に生きようとする児童
授業で獲得が期待されること	- 郷土の人・こと・ものを知る授業 - 郷土を身近に感じる授業 - 郷土の良さや素晴らしさに感動する授業 - 郷土を誇りに思う授業 - 郷土の大切さ、かけがえのなさを感じる授業 - 郷土の人々とつながる授業 - 郷土に生まれ、郷土の一員である自分を自覚する授業 ※「愛着」・・・心がひかれて、大切にしたいという思い	- 郷土を大切にしようと感じる授業 - 郷土の営みに協力しようと思う授業 - 郷土に貢献しようと思う授業 - 郷土を元気にしよう考える授業 - 郷土を発展させよう考える授業 - 郷土に生まれ、そこで生活している自他を大切にしよう考える授業 - 自己の郷土への思いを発信し、郷土を愛する仲間を増やそう考える授業 - 郷土で培われた自己の個性を生かし、将来他地域や外国においても自己の務めを果たす資質を育む授業
育みたい学習態度	～主体的・対話的で深い学び～ - 自ら課題、自ら解決…探究的に学習する - 人と関わることによって、考えを深めたり、新たな情報を得たり、協力・分担して研究したりする - ものごとを自分との関りでとらえる - 学んだことを通して自己の生き方を考える - 学んだことを発信する	

(2) 全体を4グループに分け、グループごとにテーマを設けて研究した。

(3) 授業実践を通じて実証的に研究を進め、メールを活用して指導案の検討を行った。

(4) 1課2館（ふるさと文化財課、図書館、中央公民館、）と協働して授業づくりを行い、郷土学習の充実を図った。

(5) 『歩こう 調べよう ふるさと七生』などの資料を効果的に活用して、児童が主体的に問題発見や問題解決を行うようにした。

Ⅱ 郷土教育推進研究委員会の組織及び研究経過

1 研究組織

	役	氏 名	所 属 等
役員・事務局	所 長	正留 正巳	教育センター
	委員長	長崎 将幸	平山小学校長
	副委員長	秋田 克己	旭が丘小学校副校長
	指導主事	加藤 信秀	日野市教育委員会 学校課
	コーディネーター	中村 康成	教育センター
	所 員	尾形 斉	教育センター
Aグループ	委員 世話人	平石 香奈子	第四幼稚園・教諭
	委員	大平 晴	滝合小・教諭
	委員	若林 裕登	日野第七小・教諭
	委員	白川 未来	ふるさと文化財課・学芸員
	顧問	會田 満	元渋谷区立常盤松小学校長
Bグループ	委員 世話人	朝比奈 雅也	潤徳小・教諭
	委員	小高 圭太	南平小・教諭
	委員	井戸川 正弘	旭が丘小・教諭
	委員	永山 和	仲田小・教諭
	委員	原田 真紀子	七生緑小・主任教諭
	委員	佐野 綾香	中央図書館・司書
	顧問	吉野 美智子	元百草台小学校長
Cグループ	委員 世話人	柳井 大輔	日野一小・教諭
	委員	米原 和哉	日野三小・教諭
	委員	白須 隆	日野五小・教諭
	委員	真野 尚人	日野八小・教諭
	委員	高橋 秀之	ふるさと文化財課・学芸員
	顧問	小杉 博司	元日野第一小学校長
Dグループ	委員	佐藤 隆寛	豊田小・教諭
	委員	大竹 弘通	日野四小・教諭
	委員	澤久保 敦	平山小・教諭
	委員	峰尾 恭子	東光寺小・主任教諭
	委員 世話人	白石 誠	夢が丘小・主任教諭
	委員	長谷川 正	中央公民館高幡台分室
	顧問	高橋 清吾	日野第一中学校統括校長

郷土教育推進研究委員会のメンバーは、委員長①、副委員長①、指導主事①、顧問④、幼稚園教員①、小学校教員①⑥、ふるさと文化財課②、図書館①、中央公民館① 及び事務局で構成されている。

(○数字は人数)

各委員をA・B・C・Dの4グループに分け、それぞれに助言者として顧問が一人ずつ入った。

グループのまとめ役「世話人」を、互選で決めた。



グループの話し合い



グループでフィールドワーク

2 研究経過

月	日	曜	事 項	内 容 等
5	18	火	第1回委員会	辞令伝達、計画確認、グループ協議
6	15	火	第2回委員会	夏季研修計画確認、グループ協議
7	28	水	第3回委員会	夏季研修（日野宿フィールドワーク）
9	—	—	第4回委員会	オンライン指導案検討
10	26	火	第5回委員会	A・Cグループ研究授業
11	30	火	第6回委員会	B・Cグループ研究授業
12	—	—	個別研究	研究の成果と課題を個々に考える
1	25	火	第7回委員会	中止、リモートでプレゼンを閲覧
2	14	月	第8回委員会	中止、発表データをC4thに保存

・フィールドワークは、密を避け、グループ単位で行動

・9月は、クロムブックでオンライン協議

・1月は個々に発表を閲覧。紙上で意見交換

Ⅲ 各グループの研究

1 Aグループ

〔研究テーマ〕

「主体的な学びから郷土にふれ、郷土を愛する幼児・児童の育成」

〔研究の内容〕

- (1) 年長児「畑のお米と田んぼのお米を育ててみよう」平石香奈子(第四幼稚園)
- 。 平山陸稲の栽培体験をした。
 - 。 紙芝居を自作し林丈太郎を伝えた。
 - 。 陸稲を収穫し、家庭の協力で試食した。
 - 。 園児が米に親しみを感じ、「おいしい」と友達に話した。



園児が平山陸稲を畑に植える

- (2) 4年道徳「日野市で生まれた林丈太郎の平山おかぼ発見の努力」大平 晴(滝合小)
- 。 多摩のどうとく読み物「平山陸稲」を読み、林丈太郎の努力に気付いた。
 - 。 林丈太郎の努力を支えた思いは何か考えた。
 - 。 日野に生きる自分にできることを見つめた。
- (3) 3年総合「日野市の農業を調べよう」若林裕登(日野七小)
- 。 たるトマトなど日野市の農作物を取り上げ、農業のやり方をJumboardで意見交換した。
 - 。 農家の苦労を知るとともに、自分たちが給食で食べているという事実も知った。
 - 。 農業について学ぶことを通して、日野市への愛着が深まった。

〔成果と課題〕

〈成果〉

- 。 幼児・児童が郷土に愛着を感じた。
- 。 幼稚園で制作した紙芝居を小学校でも活用し、幼小で連携ができた。

〈課題〉

- 。 教科学習で郷土教育を行う場合、目標は教科の目標か郷土教育の目標か不明である。
- 。 情報量が多くならないように、指導計画を工夫すること。

令和3年度
Aグループ
主体的な学びから郷土にふれ、
郷土を愛する幼児・児童の育成

世話人	平石 香奈子 (第四幼稚園)
	大平 晴 (滝合小学校)
	若林 裕登 (日野第七小学校)
	白川 未来 (ふるさと文化財課)
顧問	會田 満 (元渋谷区立常盤松小学校長)



研究授業で教材文を見つめる児童



平石香奈子委員自作の紙芝居

2 Bグループ

〔研究テーマ〕

「郷土への愛着を深める ～身近な地域をもっと知ろう～」

〔研究の内容〕

(1) 3年総合「日野市食べ物博士になろう！

～日野市の特産物を調べよう～」

朝比奈雅也(潤徳小)

- 。地域の梨農家を見学し、話を聞いた。
- 。市の農業をポスターで校内に伝えた。
- 。地域の良さを実感。



卵農家紹介のポスター

(2) 3年総合「南平の果てまでイッテQ

～地域のとおきを見付け伝えよう～」 小高圭太(南平小)

- 。学区域を巡り、興味をもった場所ごとにグループを作り、調べた。
- 。公園、児童館、駄菓子屋等について、インタビューやインターネットなどで調べたことを伝えていくことにした。

(3) 4年国語「心の動きを言葉にして、詩を書こう。

～感動を言葉に～」 井戸川正弘(旭が丘小)

- 。旭が丘ゆかりの詩人異聖歌の詩から、表現方法を学んだ。
- 。旭が丘中央公園に行き、気に入った景色を撮影した。
- 。教室で、写真を見ながら詩を創作し、相互で鑑賞した。
- 。詩作の楽しさを知り、地域の素晴らしさに気付いた。



気に入った場所の写真を見て詩を書く

(4) 4年総合「多摩川とともに生きる ～多摩川はかせになろう～」 永山和(仲田小)

- 。多摩川 환경을よりよくするための地域の取り組みを調べた。多摩川漁協の人の話を聞いた。
- 。多摩川について調べたことをグループでグーグルスライドにまとめ、発表会をした。
- 。多摩川をきれいに残していくために今の自分ができることを考えた。

(5) 3年総合「生き物大作戦～ヤゴ救出大作戦～」 原田真紀子(七生緑小)

- 。プールのヤゴを救出し、地域の公園の池に放流した。出合った感想から学習問題を考えた。
- 。道徳の授業で「ホタルの引っこし」を読み、自然環境と動植物の生命のつながりを考えた。
- 。身近な環境の良さが大人になった時にも持続するために、今の自分にできることを考えた。

〔成果と課題〕

〈成果〉

- 。身近な地域を題材とすることで、児童が実感をもって学習に取り組むことができた。
- 。休日に公園へ行ったり、環境を大事にしようとしたり、児童の地域への関心が高まった。

〈課題〉

- 。郷土教育を各教科・領域で横断的に行うとともに、学校全体として全学年で実施すること。

令和3年度 Bグループ

郷土への愛着を深める
～身近な地域をもっと知ろう～

世話人 朝比奈 雅也(潤徳小学校)
小高 圭太(南平小学校)
井戸川 正弘(旭が丘小学校)
永山 和(仲田小学校)
原田 真紀子(七生緑小学校)
佐野 綾香(中央図書館)
顧問 吉野 美智子(元百草台小学校長)

3 Cグループ

〔研究テーマ〕

「日野市の郷土関係機関や人材との連携を通して」

〔研究の内容〕

(1) 4年総合「日野市のいいところ見つけ」

柳井大輔(日野一小)

- 単元のはじめに、元校長小杉博司先生の指導で地域のフィールドワークを行った。
- 調べたことをクロムブックでスライドにまとめ、学習展示会で地域の人に伝えた。
- 展示会後もさらに調べたり、家族と見に行ったりするなど、郷土への関心が高まった。

令和3年度

Cグループ

日野市の郷土関係機関や人材との連携を通して

世話人	柳井 大輔	(日野第一小学校)
	米原 和哉	(日野第三小学校)
	白須 隆	(日野第五小学校)
	真野 尚人	(日野第八小学校)
	高橋 秀之	(ふるさと文化財課)
顧問	小杉 博司	(元日野第一小学校長)



クロムブックで情報を探す



友だちとパンフレットを作る

(2) 4年国語「パンフレットを読もう」

米原和哉(日野三小)

- 国語の教科書で、「伝える相手」「伝える目的」「読みやすくするための工夫」というパンフレ

ット作りの観点をつかんだ。

- 『歩こう 調べよう ふるさと七生』等の郷土資料を読み、スライドを作り発表し合った。
- 日野に関する発見や、「行ってみたい」との思いが生まれた。

(3) 4年社会「受けつがれる祭り ～府中くらやみ祭～」 真野尚人(日野八小)

- 高幡不動尊、落川史跡公園、新選組祭りの資料から日野市の文化財と年中行事を整理した。
- 「くらやみ祭」を学習後、日野市の文化財や行事を受け継ぐために自分たちにできることを考えた。
- 日野市の文化財や年中行事を知って、大切に受け継ぎたいと考える児童が増えた。

〔成果と課題〕

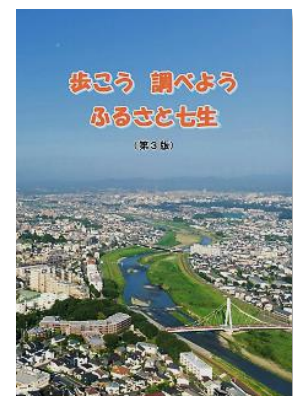
〈成果〉

- 地元の関係機関との連携で、児童の学習意欲を高めることができた。
- それぞれの学校のある地域の特徴を生かした授業ができた。

〈課題〉

- 今後も関係機関との連携を継続していくための方策を考え、遂行すること。

『歩こう 調べよう ふるさと七生』



4 Dグループ

〔研究テーマ〕

「郷土への関心、理解を深め、郷土への愛着を育む教材の開発を目指して

～日野の新たな魅力発見！～」

〔研究の内容〕

6年社会「明治の新しい国づくり」

澤久保敦（平山小）、グループ共同研究

- 。Dグループでは、日野市のどの学校においても扱うことができ、またカリキュラムや授業時数の制限をあまり受けずに、日野についての関心、理解を深め、愛着を深めることができる教材の開発を目指した。
- 。明治政府が推し進めた富国強兵、殖産興業の政策において、日野の養蚕が大きな役割を果たしていることに着目して、日野の養蚕を6年生の歴史学習「明治時代の殖産興業」と関連させて取り上げた。
- 。桑ハウスのフィールドワークや、日野市ふるさと博物館作成の資料『日野と養蚕』を基に教材研究を行い、児童が読み取れる教材（資料）を作成した。



フィールドワークで訪問した桑ハウス

- 。出来上がった資料は、「日野市の養蚕」「蚕の飼育」「養蚕の研究」「養蚕と経済」の4点で、児童は、調べたいテーマごとに分かれてグループを作った。
- 。児童は、「殖産興業と日本の養蚕業の関係を考える」ことを学習課題として、グループのテーマに沿ってメンバーと話し合い、学習を進めた。
- 。各グループからの発表の後で、「日野は殖産興業とどのように関係していたのか」と投げかけ、日野が果たした役割について目を向けていくようにした。
- 。資料から児童は、「養蚕について研究する施設が日野に造られていた」ことや、「別の地域にある蚕糸試験場に提供する桑の葉を日野で育てていた」こと、その理由が「良質な桑を育てる地理的条件が揃っていた」こと等、日野に関連した内容を見出すことができた。
- 。「日野は殖産興業を支えていたので、すごい」という発言が出るなど、児童は、郷土である日野が大きな役割を果たしたことを押さえることができた。

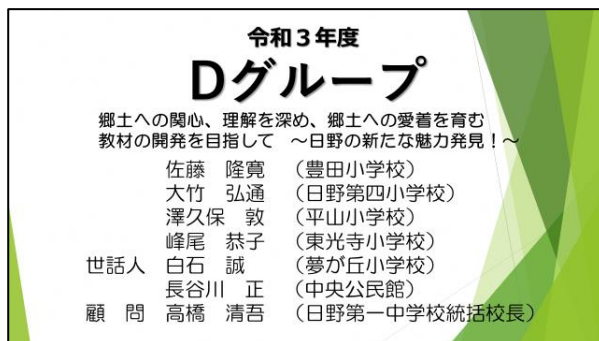
〔成果と課題〕

〈成果〉

- 。市内のどの学校でも取り扱え、単元の1時間で学習できる教材作りと授業作りができた。

〈課題〉

- 。今後も関係機関との連携を継続していくための方策を考え、遂行すること。



グループで発表をする児童

Ⅳ 郷土教育の充実を目指して

1 ふるさと文化財課の活動

ふるさと文化財課は、令和3年4月からスタートした日野市役所の新たな部署である。これまで個別や点でとらえてきた文化財や郷土資料を面でとらえて、「まちの物語」として日野に暮らす人々の日野への愛着を高めたり、子供たちのふるさと学習につなげたりすることを目指して活動をしている。

- (1) 月ごとの郷土教育推進研究委員会に委員として出席し、授業づくりのための意見を述べたり、郷土学習のための資料を提供したりした。
- (2) 郷土教育推進研究委員会夏季研修会のフィールドワークの付き添いや、見学先での解説を行った。
- (3) 研修会の講師として、「新選組と日野宿」「真慈悲寺と鎌倉幕府」のテーマで講演を行った。
- (4) わかば教室で出前授業「考古学体験」を行った。
子供たちは、市内万蔵院台から出土した縄文土器の洗浄や接合体験に、興味深く取り組むことができた。



夏季研修会で講師を務める

2 図書館の活動

高幡図書館で、小学生向けに、ブックトーク『ほどくぼ小僧生まれ変わりの勝五郎』を行った。

DVD『ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語』も視聴し、DVDを借りて帰る子もいた。地域資料と子供を結び付ける取り組みができた。



冊子『ほどくぼ小僧生まれ変わりの勝五郎』

3 若手教員（1年次）夏季課題別研修会の支援

教育委員会からの協力要請があり、郷土教育研修会を企画した。実施日は、郷土教育推進研究委員会と同日の7月29日（水）とした。午前中は、新型コロナ対策のために大人数で行動を避け、グループに分かれて日野宿でフィールドワークを行った。ほとんどが初めて日野の教育に携わる教員であり、興味をもって街を歩き、日野の歴史の面白さを感じ取っていた。



「新撰組と日野煉瓦」の講義を聞く

午後は、ふるさと文化財課の学芸員をはじめとする講師による講義を聞く研修を行った。テーマは、「新選組と日野煉瓦」「真慈悲寺と鎌倉幕府」「日野の養蚕」であった。参加者からは、「児童に日野市の魅力を伝えたいと思った。」「日野の出身でないので、この研修がとても勉強になった。」などの声が聞かれた。

4 わかば教室の平山陸稲栽培体験

平山地域の篤農家林丈太郎（1875～1923）は、1911年（明治44）の秋、自分の畑の陸稲の中に、穂先の毛が長く紫色をしているものを発見した。その粳で、翌年、翌々年と選抜と育種を重ねた。大正7年（1918）に種として固定され、「東京平山」と命名された。平山陸稲は味が良く、干ばつや病虫害に強く、全国に広まった。

ふるさと教育係では、「平山陸稲の発見者、林丈太郎の思いや努力に迫るとともに、栽培の普及を図る。」「わかば教室の児童・生徒が稲作体験をするとともに、郷土の歴史に親しむ。」ことをねらいとして、わかば教室の子供たちと平山陸稲栽培に取り組んだ。



平山陸稲のマーク
(J A 東京中央会作成)

陸稲づくりの経過

月	日	活 動 等
5	7	種粳を水に浸けて沈んだものを選抜。浸種。
5	7	深さ5cmのコンテナボックスに極小赤玉土を入れ苗床を準備。
5	10	播種。沈まなかった粳も播く。無肥料とNPK=8・8・8を入れたものと比較実験。
6	10	コンテナボックス（大）に黒土を入れ、肥料を混ぜて代掻き。
6	14	田植え。苗床に施肥した方が良い苗ができ、浮いた粳は発芽しないことが判明。
7月下旬 9月上旬		追肥2回。この間、陸稲はよく水を吸うので毎日水遣り。8月10日、出穂を発見。特徴である紫色の長い禾（のぎ）が見える。
9	13	かかしを自作し、設置。
10	20	稲刈り。はさ掛け。
12	15	脱穀。粳摺り。4合以上の収穫。来年用の種粳を確保。
12	16	試食。能登産コシヒカリと食べ比べ。



稲穂の上に舞う手作りのかかし

【子供たちの感想】

- （田植えのとき）思ったより深く植えないといけなくて難しかった。
- 鎌で稲を刈る時の感触と音がとても気持ちよかった。
- （脱穀や粳摺りを）昔の人はもっと手作業でやっていたと考えると、めちゃくちゃ大変だなと思った。
- 白米より食感が強くおいしかった。
- きなこのような香ばしい風味があった。

V 郷土教育推進研究の成果と課題

成果 ◦第3次日野市学校教育基本構想を基に、郷土への関心や愛着を育てる授業が工夫できた。
◦フィールドワークは、参加者自らコースを決めたことで主体的に取り組め、ふるさと文化財課の協力で講義や見学先での解説を聞くことができ、大きな学びに結び付いた。

課題 ◦今年度や、以前の郷土教育の実践を基にして、さらに効果的な授業を研究する。
◦どの学校、どの学年、どの学級でも郷土教育に取り組めるようにするため、年間指導計画例を作成する。

3 教育資料・広報係

広報活動

1 教育センターの Web サイト

(1) Web サイト運営の趣旨

①教育センター事業の広報の役割

教育センターでは、Web サイトを活用し、センター事業の活動内容や状況を広く学校関係者をはじめ、市民の方々にもお知らせし、多くの方々からのご理解を頂くことに努めている。

②教員の授業力向上のために

日野市内の小・中学校においては、教員用に 1 台ずつ、パソコンが配布されている。それらは、全てネットワークで結ばれており、各小中学校と教育センターとの情報交換や教育情報がパソコンを通して見ることができる。

(2) 教育センター Web サイトの主な内容

○教育センターの概要

○各係の活動内容・活動報告やわかば教室の活動等の様子

○教育センターが作成した資料、教育センター要覧、教育センターだより、教育センター紀要等の掲載

○郷土教育推進研究委員会作成の「郷土日野」指導事例集 第 1 集～15 集と「歩こう 調べよう ふるさと七生」の掲載

2 「教育センターだより」の企画・編集

教育センターの事業活動の紹介とともに、成果の普及と事業の理解を図るため、年 2 回（令和 3 年度は 7 月と 1 月）発行し、市立幼稚園・小学校・中学校及び市内関係諸機関に配布している。

内容は各部事業のテーマや活動方針や計画、活動経過報告などである。広報紙として、より多くの方々に読んで頂けるように、さらに内容の充実と工夫・改善をすることが今後の課題である。

3 「教育センター紀要」の発行

本センターの各部事業の成果と課題を明らかにし、その普及と活用の促進を図るために、年 1 回発行し、市立幼稚園・小学校・中学校及び市内関係諸機関に配布している。

4 教育資料室の資料管理

図書管理システムを使用して、教育資料室内の全ての書籍・資料を登録し、日野市立小・中学校の図書室のパソコンからセンター蔵書の全てが検索できる状態にある。

B 研修部の事業

教職員研修係

若手教員の育成に取り組む教育センターの活動

I 研修部教職員研修係の主な業務

- ・若手教員の1年次から3年次までの育成研修における授業観察と指導
 - ・教育センターで行われる研修会や夏季教員研修の課題別研修会の受付業務や会場設営の支援
- ※ 若手教員の授業観察及び指導は研修部所属の3人の所員（他の業務とも兼任）で分担して行った。

II 若手教員育成研修

1 指導内容と人数

(4月26日現在)

	指導内容	小学校	中学校	合計人数
1年次	年間3回の授業観察と指導の実施	25名	10名	35名
2年次	年間1回の授業観察と指導の実施	26名	9名	35名
3年次	年間1回の授業観察と指導の実施	25名	19名	44名
	合計	76名	38名	114名

※1年次若手教員の人数には期限付任用教員の数を含む

2 1年次若手教員の育成

年3回、所員が1年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点は、

- ・学習指導案が適切に作成されている
 - ・児童生徒と良好なコミュニケーションが図れている
 - ・説明、発問は児童生徒の理解度を把握しながら行い、分かりやすい
 - ・板書は計画的で、学習の流れを示し、丁寧である
 - ICT機器を適切に活用し、UD（ユニバーサルデザイン）を考慮している
 - ・教材研究を継続して行っている
 - ・話し合い活動の準備は適切に行われている
 - ・児童生徒に変容がみられる
- など

1年次では、良かった点や課題を示し、次の授業に向け改善策を話し合い、若手教員の指導にあたった。



1回目の授業観察の頃は、まだ児童生徒の様子を見て説明や発問することが十分とは言えず、話も教員からの一方通行になる傾向が見られた。

しかし、校内でのOJTによる指

導や本人の地道な努力もあり、3回目の授業観察の頃には、基本的な説明・発問・板書のスキルが向上し、児童生徒の表情や発言から理解の度合いを把握し、授業を進めようとするゆとりが見られるようになった。また、児童生徒とのコミュニケーションも自然な感じで図れるようになり、先生としての存在感が増し、信頼関係の深まりを感じる事ができた。

引き続き、教員としての基礎・基本を身に付けるため、話術を磨くこと、教材研究を続けること、児童生徒理解を深め、人権感覚を大切にするように指導、助言した。



(8月3日、4日に行われた1年次研修の様子)

3 2年次若手教員の育成

年1回、所員が2年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点は

- ・1年次の成果と課題を踏まえ、ねらいが明確で授業の流れにメリハリがあり、山場を明確にした授業展開となっている
- ・興味、関心を高め、理解を深める教材の開発を行い、ICT機器の適切で効果的な活用とUDの取り組みをしている
- ・教科指導における生活指導のありかたを理解し、授業規律やルールの徹底を行っている

など

2年次では、より実践的な指導力をつけるため、授業改善の助言を行った。

授業力の向上では単元のねらいをしっかりと理解し、山場を適切に設定した授業展開を目指すように話した。

また、次年度に向けて、児童生徒の疑問や要求にも多面的に対応できる力を付けていくことが課題となることを、担当所員の豊富な経験を活かし、具体的な例を挙げながら指導にあたった。

4 3年次若手教員の育成

年1回、所員が3年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点は

- ・主体的で、対話的で、深く考えさせる実践的な授業を目指し、問題解決型授業への取り組みがみられる
- ・児童生徒の疑問や要望などに、即座に対応できる授業を目指し、専門性を高めようとしている。
- ・コミュニケーション能力を高め、表現力を育成する指導の工夫を行っている
- ・外部との連携や学校の組織的な動きについて理解を深めている

など

3年次では授業力の向上が随所でみられるようになる。滑らかな導入、メリハリのある授

業の流れ、ねらいに合致した山場があり、振り返りも簡潔に行われる授業展開を見ることが多い。また、児童生徒の思考スピードに、教員の教えるスピードが合っていて、児童生徒の理解度に応じた柔軟なやり取りができるようになってきている。

この様な、3年次若手教員の大きな成長を目の当たりにする時、本人の日々の努力はもちろん、多くの先輩教員による地道で丁寧な指導があったことを強く感じるものであった。

5 夏季若手教員育成研修

毎年、夏季に行われている2年次、3年次の若手教員を対象とした半日単位の研修会で、今年度は7月29日（月）の午前に2年次、午後に3年次の研修が実施された。



（2年次研修の様子）



（3年次研修の様子）

2年次の研修内容は、児童生徒の主体的な学習を促す授業づくりで、市内小学校の指導教諭（音楽）の先生が講師となり、より実践的な研修が実施された。受講生は自身の2学期からの授業改善に向け熱心に取り組んでいた。

3年次の研修内容は外部機関の連携と保護者対応についてで、各機関の担当者が講師となり、業務内容と学校との連携及び組織的な対応について詳細な説明があった。また、保護者との適切な対応については主幹教諭の先生から具体的な講話があり受講生はさらに理解を深めていた。

III 日野市教育委員会主催研修会への支援

日野市教育委員会が開催する日野市立幼稚園・小学校・中学校教員対象の研修会で、主に教育センターで行われる研修会と夏季教員研修の課題別研修会の受付・会場表示、募集業務、受付名簿作成、会場設営等の支援を行った。

今年度も各種の研修会が感染予防・感染拡大防止対策のため中止やオンラインでの研修となり、前年度より支援回数が減っている。また、1年次の若手教員育成研修も、同対策のため、年間12回のうち3回がオンラインでの開催となった。

※ 支援を行った主な研修

- ・若手教員育成研修（1年次）（教育センターを会場とした実施回数5回）
- ・理科実技研修 ・「多摩動物公園」研修（11月実施）と（12月実施）

IV 「若手教員の授業観察のためのガイドライン」について

【1】ガイドラインを設定する趣旨

- （1）ガイドラインは、教育センターの研修部員による授業観察が学校と共通の認識のもとに設定した視点に基づいて行なわれ、若手教員の授業力向上に資するものになること

を目的とする。

- (2) ガイドラインを設定することで、授業観察の視点を明確にし、事前に学習指導案をもとに授業観察の準備ができるようにする。

【2】研修部員との事前連絡及び授業観察のやり方

- (1) 授業観察日の取り決め・・・研修部員と副校長とが連絡を取り、日時を設定する。日時の変更についても副校長を通して行う。
- (2) 学習指導案の提出・・・学習指導案は、指導のための基本的資料である。提出にあたり、管理職や指導教員の指導を受け、授業観察一週間前には提出する。必要に応じて資料等も送付する。必要に応じて学習指導案の書き換えを指導・助言する。
- (3) 授業観察の指導・・・指導時間は一単位時間とする。
- (4) 観察以降の指導・・・授業観察以降も管理職に相談し、必要に応じて若手教員の事後指導をする。

【3】学習指導案作成の仕方・・・学習指導案の書き方については、原則的には、令和3年度〈東京都若手教員育成研修〉「一年次（初任者）研修」（東京都公立小学校・中学校）の研修テキストを参考にする。

特別支援学級担当については、令和3年度〈東京都若手教員育成研修〉「一年次（初任者）研修」（都立特別支援学校・区立特別支援学校 東京都公立学校特別支援学級）の研修テキストを参考にする。

【4】若手教員の授業の指導における重点

- (1) 1年次・・・授業における基礎的・基本的事項（学習規律等も含む）の資質・能力の育成を図ることを目的とし、学習計画に沿って授業を実施することができるよう指導・助言する。
- (2) 2年次・・・年間指導計画を踏まえ、単元及び一単位時間における児童・生徒に身に付けさせたい力を明確にした授業ができるように指導・助言する。そのために教材を工夫した実践的授業の指導力の向上を図る。
- (3) 3年次・・・学校の教育課題の解決に向けた授業実践ができるように指導・助言し、あわせて、外部との連携や学校運営力等の課題解決力の伸長も図る。

【5】授業を観察する上での視点

【目標】①教科・科目等の目標→単元の目標→本時の目標が一貫しているか（指導観の把握）。

②児童・生徒に身に付けさせたい力は明確か。

③本時の指導に、「児童・生徒観」が生かされているか。

【展開】④本時の目標を達成するための学習活動となっているか。

⑤授業における指導や学習活動のポイント（山場）はどこか。

⑥「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が図られているか。

⑦時間の配分は適切か。

【学習活動に即した評価、指導上の配慮事項】

⑧本時の目標と評価項目との整合性があるか。

⑨児童・生徒の学習意欲を高める学習活動の工夫があるか。

⑩児童・生徒の学習の定着の状況に応じた、個別の指導の工夫が明記されているか。

令和2年4月1日 改訂

C 相談部の事業

相談部

I 学校生活相談（わかば教室）の概要

I C TやS N Sなどの活用により社会のグローバル化が急速に進化・発展している中で、学校では長期欠席や登校しぶりなどが、青少年の健全な成長に関わる大きな課題となっている。これらの課題に対応するため、児童・生徒の学校復帰及び社会的自立のための支援や適応指導を行うことを目的として、平成12年4月1日「日野市適応指導教室設置要綱」が施行された。これに伴い、同年5月に日野市適応指導教室「わかば教室」が開設された。その後、平成16年4月「日野市立教育センター」設置に伴い、同センターの相談部（学校生活相談係）となった。そして平成31年4月1日「日野市わかば教室設置要綱」が施行されたことに伴い、その役割がますます重要になっていることを踏まえ、以下の事業を行っている。

II わかば教室の事業

Ⅲの2で述べる長期欠席の要因・背景により、長期欠席状況にある児童・生徒を対象に、個々の状況に応じた支援・指導を通して、学校復帰に向けた支援とともに、将来の社会的自立を視野に入れた支援・指導を行う。

1 わかば教室の目的

- (1) 安心して過ごせる「学びの場（居場所）」とする
- (2) 「学校復帰」ができるようにする
- (3) 将来、「社会的自立」ができる力を育む

2 わかば教室の支援・指導の基本方針

「わかば教室」の主な活動（4つの柱「個に応じた教育活動」「豊かな体験活動・スポーツ」「教育相談」「個別支援の記録」）を通して支援・指導を行う。

- (1) 児童・生徒一人一人に合った進度で学習を進め、基礎学力を身に付けさせる
- (2) 体験活動を取り入れそれぞれの活動を通して自立のための支援を行う
- (3) 児童・生徒の「よき相談相手」「よき学び相手」「よき触れ合い相手」になって指導する
- (4) 教育相談を継続して行うための個別の支援記録を作成する
- (5) 在籍校・保護者と連携し、本人の学校復帰を支援する

3 わかば教室の生活

日課（令和3年度生活時程）

- 9:20～ 朝の会（連絡等）・読書
- 9:30～ 学習タイム1・2（各40分）
- 11:10～ 学習タイム3〔わかばタイム〕
(50分)
- 12:00～ 昼食・昼休み
- 13:00～ 清掃(火・金)
- 13:15～ 学習タイム4・5（各30分）
- 14:30～ 帰りの会（翌日の連絡等）

※学習タイムは、国語、算数(小)・数学(中)、英語(中)を中心とした学習と、わかデミー(学習支援)、eラーニングの時間

※わかばタイム・昼食・ミーティングの時間は小学生・中学生合同で実施

※個別面談(相談)は児童・生徒の状況により生活時程の中で行う

4 入室・退室の手続き

(1) 入室の手続き

- ① 保護者が、学校や教育委員会、発達・教育支援センター（エール）等に連絡するか、又はわかば教室に直接申し込みをして「見学」と「入室相談」をする。
- ② 児童・生徒と保護者が入室を希望する場合、体験通室を段階的に経た後「入室願」を在籍校の校長に提出する。校長は、入室が適切と判断した場合「入室申請書」を作成し、保護者から提出された「入室願」を添えて日野市教育委員会に提出する。
- ③ 教育委員会が承認すると「入室許可書」が発行され、入室が決定する。

(2) 退室の手続き

- ① 保護者が「退室願」を在籍校の校長に提出する。
- ② 校長は、「退室申請書」を作成し、保護者から提出された「退室願」を添えて、日野市教育委員会に提出する。
- ③ 教育委員会が承認すると、退室が決定する。

Ⅲ 令和3年度の通室利用

1 入室児童・生徒の推移（各年度末人数、ただし令和3年度は2月末日現在である）

(1) 平成30年度から令和2年度の入室が許可された児童・生徒数の推移：数字の単位（人）

年 度	小学生	中学生	合 計
30(31年2月28日現在)	3(+12)〔15〕	25(+32)〔57〕	28(+44)〔72〕
令和元(2年2月29日現在)	5(+17)〔22〕	15(+54)〔69〕	20(+71)〔91〕
2(3年2月28日現在)	2(+12)〔14〕	3(+45)〔48〕	5(+57)〔62〕
3(4年2月28日現在)	2(+21)〔23〕	2(+52)〔54〕	4(+73)〔77〕

※()内の数字は体験通室者人数であり、〔 〕は合計通室者数である。

※令和3年度学校復帰者は小2人、中4人（内転校0）である。

(2) 令和3年度の入室児童・生徒数の推移（体験入室者含む・退室小…2 中…4、計6含まず）

令和3年度	小 学 校						計	中 学 校			計	合計
	1	2	3	4	5	6		1	2	3		
4月30日	0	0	1	2	1	4	8	2	9	28	39	47
5月31日	0	0	1	2	1	5	9	3	11	29	43	52
6月30日	0	1	2	2	2	4	11	5	13	28	46	57
7月20日	0	1	2	2	2	4	11	5	13	28	46	57
8月31日	0	1	2	2	2	4	11	5	13	28	46	57
9月30日	0	1	2	2	3	6	14	5	16	30	51	65
10月31日	0	1	4	2	3	6	16	5	16	30	51	67
11月30日	0	1	5	3	4	7	20	7	17	32	56	76
12月31日	1	1	4	3	4	7	20	7	17	32	56	76
1月31日	1	1	4	3	4	7	20	7	17	32	56	76
2月28日	1	2	4	3	4	9	23	7	16	31	54	77

2 「わかば教室」に入室する児童の長期欠席の要因・背景

児童・生徒の登校できない主な要因・背景は、友人関係、委員会・部活動等学校生活に関わること、教員との関係、学校の対応（学校不信）、学業不振、生活習慣への不適応、身体的・精神的・心理的要因等本人自身に関わること、親子関係、家庭内環境、入学・進級・転校時の不適応、現代の社会的環境等複合的なケースが多い。（入室時の面談より）

3 「わかば教室」の教育活動

児童・生徒一人一人の抱える課題を観察・面談等で把握に努め、個別の支援・指導計画を立て、指導員が共通認識を図りながら支援・指導している。また、個々の生活・学習・面接等の様子を記録・共有をすることで、以後の支援・指導・相談に生かしている。

今年度も他の通室生との関わりができない児童・生徒がいたため、教室の使用法やグループ編成の工夫などをし、個々に応じた支援・指導・援助ができるよう努めた。

（1）体験活動

年間を通して児童・生徒が体験活動に参加することを通して、楽しく充実した時間を共有することで人間関係を深め、自己肯定感や達成感がもてるように行事を計画し実施した。

今年度、実施した行事は、次の表の通りである。また、「わかばタイム」を午前中の最後の「タイム3」の時間帯に設け、作文、スポーツ、音楽、栽培、図工を曜日ごとに行った。いずれも『ヒト、モノ、コト』に関わる活動や体験活動が必要と考え、異年齢で協力し成し遂げ達成感も味わえるように、児童・生徒の実態を考慮しながら実施した。

令和3年度のわかばタイム

曜	時間帯	内容
月	T3	作文
火	T3	スポーツ
水	T3	音楽
木	T3	栽培
金	T3	図工・美術
T3 *11:10～12:00 T4・5*13:15～14:25 小学生は 14:00 まで		

令和3年度に実施した行事

月	内 容
4 月	
5 月	
6 月	
7 月	避難訓練、スポーツ大会
8 月	
9 月	誕生日会
10 月	
11 月	学習発表会
12 月	茶道体験、スポーツ大会
1 月	新年を祝う会(書初め、凧揚げ)
2 月	誕生日会
3 月	卒業・進級を祝う会、お楽しみ会

- ① 学習発表会では、児童・生徒が授業やわかデミーで取り組んだ学習の成果を展示発表した。陶芸・絵画・水墨画イラストレーション・コンピュータグラフィックスなどが展示された。児童・生徒は、「一つ一つの作品が個性豊かだと思った。」「みんなとっても上手で細かい所まで丁寧ですごかったです。」「いろんな人の作品を見る機会があって、良かった。」「個性が出ていて、面白い作品



がたくさんあって、印象に残った。」などの感想文を書いている。

- ② 「考古学体験教室」では、教育センター1階にある「郷土資料館」を見学した後、学芸員の方から説明をしていただき、土器の水洗い体験をした。さらに道具を使って模様づくりの体験や接合の体験を行った。日野市内の万蔵院台遺跡で見つかった土器に触れることで、身近な場所で古くから人々の生活が営まれていたことを実感することができた。



- ③ 電子顕微鏡を用いた特別授業では、前半は電子顕微鏡についての講義、後半は電子顕微鏡操作体験があり、トケイソウの花粉・シャープペンシル芯・爪・竹炭・蚕アリの複眼などを観察した。講堂が会場となったために参加者も多く、緊張して参加していた。



- ④ 茶道体験教室では講師をお招きして茶道の初歩の作法・抹茶や道具・お稽古について教えていただいた。そして実際に「お稽古」をさせていただいた。亭主(お茶を点てて客をもてなす)と客(お茶をいただく人)に分かれてお茶を楽しむことができた。



(2) 学習指導 (支援・指導)

- ① 成績不振が原因で登校できなくなった児童・生徒もいれば、長期欠席となったために学習に遅れが生じた児童・生徒もいる。そのため、学習の目的も「分かるようになりたい」「学習の遅れを取り戻したい」「高校入試のため」等様々である。そこで児童・生徒一人一人に応じて、基礎的な学習の支援・指導に努めた。
- ② 小学生は午前の学習タイムに国語、算数及びeラーニング(週2回)を活用した学習を行い、授業の中で個々の状況に応じて個別指導を行った。また、SSTの時間には、ゲーム的な活動をしたり校庭や体育館で活動したりするなど、楽しく取り組める活動を展開した。
- ③ 中学生は国語・数学・英語の3教科を中心に学習した。一斉授業を行うこともあるが基本的には個別学習(個別支援)である。eラーニングを活用した学習は火・木の週2回行い成果をあげている。中学3年生は進路(受験)に向けて書類作成の支援や作文指導・面接練習も行った。
- ④ わかデミー(学習支援)は自分が学びたいことを自分で考えて決める(自主性・主体性を育てる)のが目標の時間である。今ここでしかできない学びを進める時間となっている。
- ⑤ 教室(授業)に入れない児童・生徒は、別室で一人一人の習熟の状況に応じて、時間割や教材を用意して指導に当たってきた。分かるところから始め、意欲を高め、学力を向上させるように努めた。

(3) SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)

自己認知スキル、コミュニケーションスキル・社会的行動を身に付けるためのトレーニングをしている。具体的にはゲームやエンカウンターワークシートを使って、自分の考えや他の人の意見を聞き、自分自身を客観的に見つめる場面を作っている。



また、他者とのコミュニケーションが苦手な児童・生徒が多い中で、少人数でのグループトークも行っている。この時間を楽しみに通室してくる児童・生徒も見られた。

(4) e ラーニング

e ラーニングは火曜日と木曜日の週二回行っている。一人一台のPCを使い「インタラクティブスタディ」や「まなびポケット」を活用して取り組んでいる。その日の自分の状態や気持ちに合わせて活動内容を選ぶことができることもあり、参加できる児童・生徒が増えた。また他の児童・生徒の興味や関心を引き出すことができた。活動を通して自分も挑戦してみようとする場面も多く見られ、児童・生徒同士の対話的学びの場面も感じられる時間となっている。



(5) 生活指導

通室している児童・生徒は、心理的不安、人間関係の不安や悩み、生活リズムの乱れ、ゲーム依存、家庭環境等様々な課題を抱えている。これらの諸問題を改善できるように、今年度は次の目標を設定し支援・指導に当たってきた。

《子供たちの生活目標》

「自他を尊重」
「命を大切に」

《生活指導目標》

- * 夢や希望をもたせる
- * 基本的な生活習慣を身に付け、自ら行動できる力を育てる
- * 相手の気持ちを考え、人を大切にできる心を養う
- * 健康な体を作る
- * 安全指導を徹底し、事故防止に努める

目標達成のために、指導員は常に報告・連絡・相談を行い、児童・生徒に対して共通認識を図りながら指導に当たり、一人一人の個性・特性・可能性を伸ばすように心掛けた。

週1回のミーティングは通室生の情報交換と支援のステップや日常生活の改善指導、学習、行事への取り組み、安全指導等について検討した。また、対人関係における適切な言葉遣いや関わり方についてのSST活動をカウンセラーの支援を得て行ったことにより、コミュニケーションを取り、挨拶や適切な言葉遣いができるようになった通室生が増えてきた。

4 「わかば教室」の教育相談活動

(1) 児童・生徒の教育相談のねらい

- ① 心理的に安定し、継続して「わかば教室」に通うことができるようにする。
- ② 友達や先生（所員・指導員・カウンセラー）を信頼し、人と関わる楽しさを知る。
- ③ 目標を立てて、主体的に活動し、自分に自信をもち、自己肯定感をもつ。
- ④ 学校復帰についてのステップを共に考える。

(2) 保護者との教育相談のねらい

- ① 児童・生徒の生育歴や、家庭や学校での状況を把握しながら、長期欠席となった経緯や要因を理解する（場合によっては、保護者のカウンセリングも行う）。
- ② 児童・生徒をどのように成長させていくかを共に考え、個々の状況に合った学校復帰の方法を考えていく。

(3) 教育相談の方法

- ① 初回面談の実施（担当所員）：対象の児童・生徒と保護者に対して「わかば教室」について説明し、保護者に面接票に記入してもらい、学校へ登校できなくなった経緯や生育歴及び今後についての考え等の聞き取りを行った。
- ② 定期的な個別面談(カウンセラー)の実施：児童・生徒の状況に合わせ、週に1回から月に1回位の割合で30分から1時間程度の個人面談を行っている。また、相談スケジュールを毎月作成して、職員が確認できるようにしている。児童・生徒に対しては面接終了時に次の日程の確認・調整を行い、計画的に実施した。
- ③ 随時の個別面談(カウンセラー)の実施：集団活動に参加できない児童・生徒から個別に話を聞いたり、活動の相手をしたりすることで徐々に集団活動への参加を働きかけた。
また、指導員との関係作りを手掛かりに2～3人の小グループ、同学年グループ等、少しずつ人間関係が広がるよう支援した。通室が安定しない児童・生徒には電話や手紙で連絡し、面談を計画するなどして本人が通室できる環境づくりに配慮した。
- ④ 保護者面談(カウンセラー)の実施：保護者から依頼があった場合や通室生の状況に応じて行っている。来室の機会がもてない保護者には電話連絡で対応している。
- ⑤ 児童・生徒の教室内での様子や、面接での様子、学校その他関係機関での児童・生徒の様子を把握し、所員・カウンセラー・指導員が個別の指導・支援について検討し、共有することで、後の支援・指導や日常の活動への対応に活かしている。

(4) 教育相談の成果

- ① 初めは人と関わることに不安や抵抗を示していた児童・生徒が、指導員・カウンセラー等との関わりの中で徐々に信頼感をもつことができるようになり、他の児童・生徒とも関わる機会が少しずつ増えてきた。
- ② 人と関わることに苦手意識のある児童・生徒も、行事やスポーツ・ゲーム等を通して指導員、仲間と過ごすことで徐々にコミュニケーションが取れるようになっていく。さらに人と関わることで、自分に自信をもち人に対する信頼感をもてるようになってきている。このことが、通室の継続につながっていると考えられる。
- ③ 相談を通して自分自身を振り返り、自分の良い面に気づき、自信を持てるようになってきている。また、自分自身の課題にも気づくようになってきた児童・生徒もいる。
- ④ 学校復帰の可能性が見え始めた児童・生徒に対しては、スモールステップで復帰まで支援を行った。学校や保護者・関係機関と相談・協議しながら、児童・生徒をそれぞれが支えることで復帰につながりつつある通室生もいる。
- ⑤ 個別の支援・指導方法を考え、指導員やカウンセラーがそれぞれの立場から意見を出し合い、児童・生徒を多面的に捉え分析・共通認識することで、その児童・生徒に合った支援・指導を行うことができていく。

(5) 今後の課題

- ① わかば教室に、学校、発達・教育支援センター（エール）、病院及び他の機関からの紹介で来室するケースと、保護者が自ら探して来室するケースなど様々な経緯があるため、初回見学時のアセスメント（学校で頑張れそうか、わかば教室で受け入れ対応すべきか、一般教育相談や特別支援教育、医療機関における対応の方が適しているか等）が今後の支援を見立てる上で重要である。
- ② わかば教室でエネルギーを蓄えることができて、学校に復帰することが難しい現状が

ある。学校のリソースルームやステップ教室・保健室・相談室の利用や、放課後に登校して担任の先生と面談すること等、部分登校に努力する姿が見られる通室生について、在籍校の教室で過ごすことは大きな一歩である。一方、クラスや部活動の中に話せる友達がいることが、児童・生徒にとって大きな励みになる場合もある。今後も復帰の方法や段階について保護者や学校及び関係機関と連携・協力することが必要である。

- ③ 児童・生徒の成長や学校復帰の実現のために保護者及び学校との相談、学校（担任・養護教諭等）との連携が必要である。そのために、保護者と面談や連絡が取りやすい関係づくり、そして長期欠席児童・生徒に対する学校の理解と適切な対応がより期待される。

5 学校・家庭・地域・関係機関との連携

（１）学校との連携

- ① 児童・生徒の通室状況と学習や行事・生活等の活動状況を在籍校に毎月報告した。また、学校での指導状況を報告書で返信してもらうことにより、指導の充実を図った。
- ② 学期に１回「わかば教室連絡会」を開き、在籍校の管理職や担任等と情報交換を行った。平成 27 年度から、全体会 1 回、個別会（学校別）2 回の形態で実施している。児童・生徒の活動状況の参観の要望には随時対応し、相互理解や連携に役立てた。
- ③ 日野市立小・中学校全校を対象に 1・2 学期に分けて学校訪問し、通室する児童・生徒の状況を把握するとともに「わかば教室」での様子について情報交換した。
- ④ 校長（副校長）・コーディネーター・担任等と随時電話連絡や面談を行った。
- ⑤ わかば教室と学校間では、毎月「通室状況報告書」を作成し、相互の連絡を通して、情報の共有化を図り、個々の児童・生徒への指導に活かしている。

（２）家庭との連携

- ① 保護者会を年 3 回実施した。児童・生徒の教室での様子や家庭での様子について相互に知る機会となり、児童・生徒に対するよりよい支援を考える機会とした。
- ② 月 1 回発行の「わかば通信」を配布し、児童・生徒の活動の様子を知ってもらうと同時に、行事への参加を呼びかけてきた。
- ③ 保護者との面談、電話連絡を適宜実施し、保護者との相互理解を深め、連携・協力して児童・生徒の課題の改善に努めた。

（３）地域との連携

- ① スクールカウンセラー連絡会、子ども家庭支援センター運営委員会に参加し、登校できなくなっている児童・生徒への理解や対応について相互理解を深めるようにした。
- ② 地域の施設や機関の協力を得て、体験学習や地域との交流を図った。

（４）関係機関（一般教育相談係、ＳＳＷ、各学校の支援コーディネーター等）との連携

- ① 各学校の支援コーディネーター等及び発達・教育支援センター（エール）のＳＳＷ（毎週 1 回電話）と必要に応じ情報交換を行い通室生への対応（支援・指導）に役立てた。

6 わかば教室における指導の成果と課題

（１）成果

- ① 児童・生徒に見られる変容
 - ・元気の挨拶や返事、発言がみられ、指導員とも良好な関係を築くことができてきた。

- ・指導員やボランティアと行う遊びやスポーツ活動で体力もつき、自分の気持ちや感情も穏やかに表現できるようになってきた。
 - ・小集団活動やSSTで、友達との挨拶や会話ができるようになり、学習タイムにも参加し「わかば教室」の日程に沿って行動できるようになってきた児童・生徒もいる。
 - ・学習や行事に参加することから通室回数も増え、自信をもった児童・生徒が見られ、共に楽しみ合う姿も見られるようになってきた。
 - ・朝、在籍校に登校してから通室したり、「わかば教室」で活動してから登校したりする児童・生徒や、定期テストを在籍校で受ける中学生の姿が見られた。
- ② 学校・家庭・関係諸機関の本教室への理解、連携、協力に見られる成果
- ・今年度も、SSWの働きかけや各学校の支援コーディネーター等の情報により、閉じこもりがちであった児童・生徒が通室するようになった事例が見られた。
 - ・個人差はあるが、安定して通室できるようになったことから、部分登校する児童・生徒や学校復帰しようとする児童・生徒も見られた。
- (2) 課題
- ① 支援や指導により児童・生徒がエネルギーを回復するとはいえ、友達関係や学習への不安は大きく、登校できても教室に入れない事例も見られる。児童・生徒の思いを大切にしながら在籍校、家庭と連携して学校復帰に向けて、支援していくことが大切である。
 - ② 通室する児童・生徒（体験通室生含む）の増加に伴い、個別指導の部屋や指導員の不足により、多様なニーズへの決め細やかな個別支援に困難な状況があった。現状の実践を見直し、さらに工夫、改善していくことも必要である。
 - ③ 通室を始めても、家庭生活の実態等で通室日数が減少してしまう児童・生徒もある。この場合は、子供に対するカウンセリングや保護者との面談が必要である。
 - ④ 入学時、就学相談の結果がほぼ尊重され、特別支援学級へ進級した児童・生徒も通室している。進級後、不登校になり「わかば教室」に通室する例があることも課題の一つである。小学校から中学校への進学にあたっては各学校で作成する「かしの木シート」等の個別の支援計画を活用して互いの連携をより緊密にする必要がある。

IV 健全育成に関わる事業

「相談部」の業務は、わかば教室に通う児童・生徒の生活改善指導、進路指導（特に進路に関する情報収集と生徒への資料の提供）とともに、教職員や保護者との学校生活上の相談である。今年度実施した健全育成の業務に関わる具体的内容は次の通りである。

1 登校しぶり、登校できない生徒の進路指導の支援

- (1) 公・私立高等学校、サポート校、通信制の学校等の資料収集、学校案内資料の収集と通室生への情報提供等に努めた。
- (2) 在籍校（担任等）、保護者と連携を取りながら、進路指導（情報提供・書類作成・作文指導・面接練習）に対する支援を行った。

2 「わかば教室」の児童・生徒の健全育成に関わる支援

- (1) 通室している児童・生徒が在籍している小・中学校の生活の決まりと「わかば教室の生活の決まり」を基に生活面や行動面での支援・指導をしてきた。
- (2) 学校生活相談系の事業は、今後も様々な「健全育成」の課題に对应していかなければな

らない。各種不適応行動や特別支援に関わる課題の相談も多くなっている。学校及び関係機関と今まで以上に協力・連携して支援をしていくことが不可欠となっている。

V 登校支援としての e ラーニングを活用した学習支援

1 固定時間

- (1) 火・木曜日 10:20～11:00 小・中学生の合同授業
- (2) 水曜日 14:00～16:00 個別の e ラーニング(予約制)

2 活動場所、使用媒体

パソコン室にある、パソコンや今年度より導入された chromebook を使用して、教育センター2階のパソコン室にて実施する。

3 活動内容

日野市より導入されている「インタラクティブスタディ」や、chromebook 内にある「まなびポケット」より「eboard」を使用し、個別の教科学習を行った。



各自のログイン名、パスワードを入力して開始する。



教科の一覧



小学生

中学生

算数

数学

漢字

国語

理科

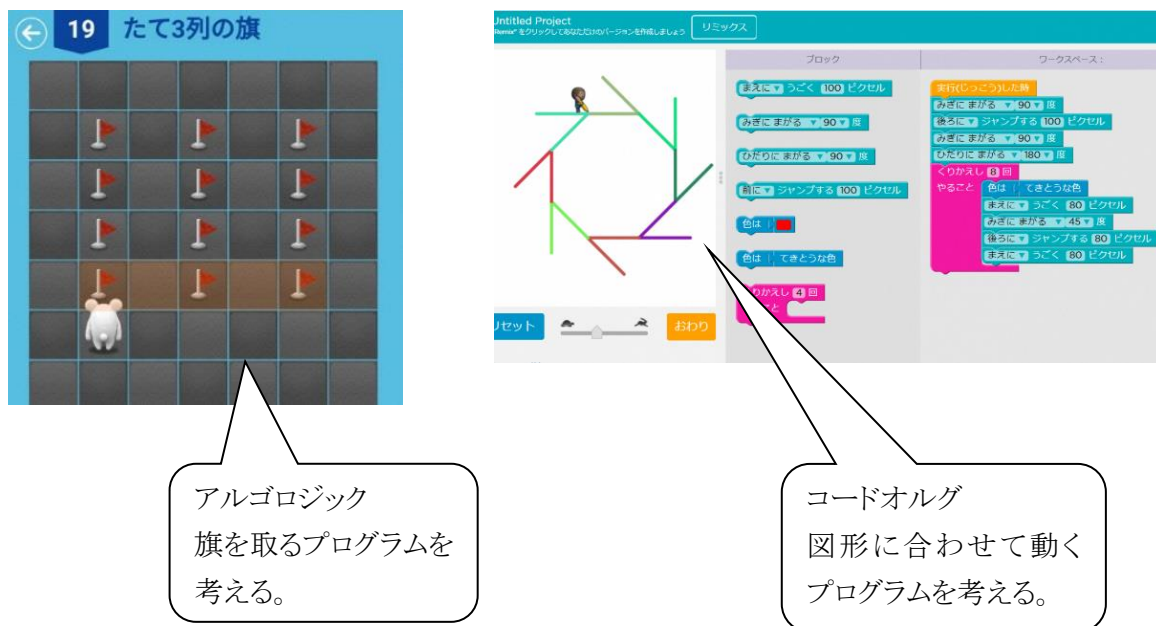
社会

英語

eboard の画面。
動画も見られます。

○Windows の Word、Excel、PowerPoint、を使用した。わかば教室で実施している栽培学習のための記録表や看板、わかば通室カード、学習発表会のための掲示物の作成、歴史にまつわるクイズの作成、卒業進級を祝う会で発表するスライドショーの作成を行った。

○プログラミングの学習（アルゴリズム、コードオルグ）を行った。



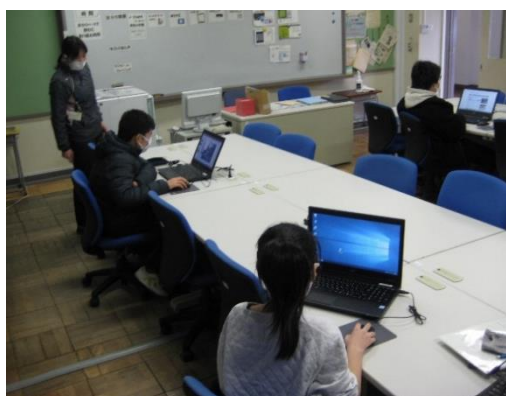
○ペイントや chromebook 内の chromebook 描画キャンバスを使用し、絵を作成した。

○タイピングの練習を行った。

4 児童・生徒の様子

児童・生徒はその日の自分の体調や気分によって、自分で取り組む課題を決定し、自分のペースでその課題に取り組んだ。周囲の児童生徒が行っている課題を参考にするなどして、自分の課題を決めて行くなど、児童・生徒同士の関わり合いも見られた。

今年度は特にタイピングに取り組む児童生徒が多く、その上達ぶりには感心させられた。また、児童・生徒から、「これがしたい、こうするにはどうしたら良いですか？」と意見が出てくる場面もあり、対話をしながら活動を進めることができた。



編集後記

令和3年度日野市立教育センター紀要「第18集」を発刊する運びとなりました。

教育センターは、学校や教員に児童・生徒への郷土教育に必要な資料の作成や情報の提供、理科授業に必要な教材、実験・実技の向上につながる指導・助言、教材の提供、機材の貸出、研修等を行い、特に若手教員には授業力や学級経営力向上につながる授業観察・助言等の支援を行い、微力ながらも日野市の学校教育の発展に尽くしてきました。

わかば教室では、通室する児童・生徒一人ひとりの教科の習熟度や進度等によってきめ細やかな学習支援を行い、教室の様々な行事を通じて社会性を育んできました。加えて、一緒に学ぶことが難しい児童・生徒の居場所となれるよう務めてきました。

現在、教育センターでは、調査研究部・研修部・相談部の三つの部で事業を行っております。今年度の事業内容及び成果をお知らせするため、本紀要としてまとめました。

ご高覧いただければ幸いです。

本年度、日野市立教育センター事業及び、本紀要の発刊に関して温かくご指導・ご助言いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに教育センター事業にご支援・ご協力いただいた地域の皆様、わかば教室の関係者の皆様、市内の各機関の皆様方に心より御礼申し上げます。

<編集委員>

編集長（教育センター所長）	正 留 久 巳	
主任研究員	谷 川 拓 也	
統括指導主事	馬 場 章 夫	
指導主事	赤 羽 利 章	
事務長	田 中 勉	
教育センター所員	千 葉 正	須 藤 昭 人
	岡 部 秀 敏	森 本 友 明
	中 村 康 成	池 本 ユウ子
	岩 井 徳 二	尾 形 齊

日野市立教育センター紀要 第18集

発行日	令和4年3月31日
発行	日野市立教育センター
	所長 正 留 久 巳
	〒191-0042 日野市程久保 550
TEL	042-592-0505
FAX	042-592-1148
Eメール	k-center@city.hino.lg.jp
URL	https://www.hino-tyky.ed.jp/center/

